

# 國學院大學學術情報リポジトリ

昔話「嫁の輿に牛」の研究：  
古典および世界との比較

|       |                                                                                                                        |
|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 花部, 英雄, Hanabe, Hideo<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00000463">https://doi.org/10.57529/00000463</a>                                      |

# 昔話「嫁の輿こしに牛」の研究

— 古典および世界との比較 —

花部英雄

## はじめに

『日本昔話大成』の昔話「嫁の輿に牛」（『日本昔話通観』の題名では「牛の嫁入り」）は、中世の説話集『沙石集』『雑談集』ほか）や物語（御伽草子「ささやき竹」）などの文字資料、そして『世界話型インデックス』のAT896「好色な聖者と箱の中の少女」の話型名で登録されている昔話などと同じモチーフの類話である。

寺に祈願に來た美しい娘を見初めた坊主が、自分の妻にしよ

うと策略をめぐらし、それが半ば成功して娘を輿で寺に運ばせる。しかし、途中で担ぎ手が輿から離れている隙に、通り掛かりの殿様が娘と牛をすり替えて、娘を輿方にする。一方、運ばれた牛は寺で大暴れするという内容である。

この昔話の研究としては、これまで主に中世文学の研究者等において、諸本の紹介や異同、物語に登場する神仏や社寺、地名、人物等にかかわって研究されてきた。そのおもなものを取り上げると、中世の物語説話の泰斗の市古貞次は『未刊中世小説解題』で、「ささやき竹」と関連の説話集との類似を指摘した。この市古に続く研究に永井義憲<sup>(2)</sup>や沢井耐三<sup>(3)</sup>らがいる。そのうち

永井は『鶯林拾葉集』に見える新たな類話を紹介し、法華経談義の場で講説された物語という視点を示しながら、物語に登場する清水寺の「坂ノ者」に注目し、平安末期に遡るものと推測したが、いくぶん成立の根拠に乏しい。

また、少女もしくはその近親者が参詣する寺や神仏を『沙石集』では地蔵菩薩、『雑談集』は鞍馬寺、『鶯林拾葉集』は清水寺、『地蔵菩薩靈驗記』は壬生の地蔵などと、それぞれに異なっている。類話と思しき説話の舞台となる場がさまざまに変化するの、これらの作品成立の背景の問題ともかわっていると思える。上述の寺院が説話の管理と関係するとすれば、それぞれの寺院に寄宿する宗教者の関与の問題といえるかもしれないが、今は問題提起にとどめておく。

以上は、国内のそれも記録された資料にもとづく国文学的な研究動向を示したものであるが、これに対し口承をベースとした内外の研究動向は遅々としており、わずかに南方熊楠と松原秀一<sup>(5)</sup>による事例紹介が挙げられる。南方は例の博識から、類話を『南総里見八犬伝』や中国の『西陽雜俎』、インドの『カター・サリッド・サーガラ』などを取り上げて紹介している。松原も、フランスの『新百物語』に載る類話を紹介するが、後半の奥の娘とのすり替えはなく、そのうえ身籠った娘が神の子を宿した

などと好色な修道僧が欺くなど、後半はキリスト教を背景にした異なるモチーフの展開で、松原は同様のコントをヨーロッパの文献を博捜し比較考察を続ける。

さて、本稿は昔話「嫁の奥に牛」の国際比較を目的としているが、始めに昔話と日本中世の説話・物語との考察を行なう。両者の比較分析を通じてその特徴を明らかにした上で、続いて国外の類話との同様の比較分析を行なう。昔話の国際比較は、昔話の地域的特性を明らかにしながら、昔話の成長過程や伝播の問題を追究することが主眼となるが、そうした視点のもとに日本の中世の説話・物語を間に挟んだ三者の比較考察を試みる。時代や場所が限定された中世の好色譚が、内外の昔話の仲介的な役割を担う可能性が考えられるからである。

## 一、日本の昔話「嫁の奥に牛」と説話・物語

### (一) 比較のための資料と一覧表

日本の「嫁の奥に牛」系の中世の説話・物語の文献資料六本と落語「お玉牛」を加えた七例に、昔話として報告された「嫁の奥に牛」一五例を、「表1 日本の「嫁の奥に牛」一覧表」に示した。昔話の事例はけっして多くはないが、比較する上での

表I 日本における「嫁の興に牛」一覽表

| 説話・物語／伝承地     | 発端   |             | 詐欺    |              | 救出 |      | 結末              | 出典         |
|---------------|------|-------------|-------|--------------|----|------|-----------------|------------|
|               | 主人公  | 機縁          | 詐欺師   | 策略           | 成否 | 救出者  | 拘替え             |            |
| 1 沙石集         | 若女房  | 地蔵参詣        | 詐欺師   | 耳元で最初の男を     | ×  | 武士入道 | 祝言から追放          | 沙石集        |
| 2 雑談集         | 姫君   | 鞍馬寺詣り       | 鞍馬の房主 | 房主に嫁げと示現     | ×  | 中将   | 子牛大暴れ           | 雑談集        |
| 3 地蔵菩薩靈驗記     | 孫姫   | 壬生地蔵参詣      | 血気の僧  | 竹筒で最初の男を     | ○  | 大名   | 子牛が大暴れ          | 地蔵菩薩靈驗記    |
| 4 麓林拾葉集       | 女房   | 清水参詣        | 法師    | 竹筒で最初の男を     | ×  | 富有者  | 坂の音の娘と結婚        | 麓林拾葉集      |
| 5 ささやき竹Ⅰ型     | 姫君   | 鞍馬の花見       | 別当    | 竹筒で最初に嫁げと示現  |    | 宮内小輔 | 子牛大暴れ           | ささやき竹Ⅰ     |
| 6 ささやき竹Ⅱ型     | 姫君   | 御正 仰上呼び祈禱依頼 | 西光房   | 竹筒で西光房に嫁げと示現 |    | 関白   | 牛大暴れ、群集殺到       | ささやき竹Ⅱ     |
| 7 落語「お玉牛」     | お玉   | 娘の噂         | 茂平    | 強制的な夜這い      |    | 牛と同食 | 牛と同食            | 落語「お玉牛」    |
| 8 青森県木造町      | さん子  | —           | 金持ち   | 強引に嫁に貰う      |    | 子牛   | 娘は殿の嫁、牛は実家      | 木造町のむかしコ集  |
| 9 岩手県遠野市土淵    | 娘    | —           | 隣村の和尚 | 娘と50両を寺によこせ  |    | 子牛   | 娘は戻り、牛は実家       | 遠野の昔話      |
| 10 〃 北上市飯豊    | 姉    | —           | 和尚    | 娘と50両を寺によこせ  |    | 殿様   | 牛を実家に返す         | すねこ・たんぱこ   |
| 11 秋田県山本郡琴丘町  | 娘    | 堂に結婚祈願      | 別当    | 寺の別当に出せ      |    | 屋形様  | 娘は戻り、牛は実家       | 秋田むかしこ第二集  |
| 12 山形県新庄市蛇塚   | 娘    | 法事に結婚呼ぶ     | 和尚    | 牛の相の折榊に寺に寄越せ |    | 殿様   | 娘は殿の嫁、牛は実家      | 新庄のむかしばなし  |
| 13 新潟県長岡市西蔵王町 | 娘    | 山の神に結婚祈願    | うすら馬鹿 | 帰りに最初に逢う男    | ○  | 殿様   | 娘は殿の嫁、牛は実家      | おぼの昔ばなし    |
| 14 山梨県        | 長者の娘 | 氏神に祈願       | 百姓薩兵衛 | 娘を薩兵衛に呉れる    |    | 子牛   | 牛が大暴れ           | 甲斐昔話集      |
| 15 岡山県御津郡     | 百姓娘  | 通うのに恨負け     | 若者    | 娘の蒲団に忍び込む    |    | 牛    | モオーの声に逃げる       | 岡山県御津郡昔話集  |
| 16 鳥取県琴浦町     | 娘    | 養の神に祈願      | 堂守    | 堂守にやれ        |    | 侍    | 牛は娘に戻らない        | 大山北麓の昔話    |
| 17 鳥取県松江市八束   | 長者の娘 | 氏神に祈願       | 小僧    | 社地に来る男が婿     | ○  | 殿様   | 牛は殿様の嫁          | 森山麓の昔話     |
| 18 香川県        | 長者の娘 | —           | —     | —            |    | 男    | 「びんめ」と思うたらボヤ(牛) | 西讃岐地方昔話集   |
| 19 鹿児島県喜界島    | 女    | 自身が神に誓願     | 青年    | 青年と夫婦になれ     |    | 殿様   | 乳飲み牛が暴れ回る       | 鹿児島県喜界島昔話集 |
| 20 鹿児島県名瀬市    | 女の子  | 自身が寺に祈願     | 坊主    | 坊主の嫁になれ      |    | 殿の子  | 娘は殿に赤牛は実家に      | 鹿児島県名瀬市昔話集 |
| 21 鹿児島県小瀬市    | 村の美人 | —           | 坊さん   | 長持ちで嫁に来い     |    | 子馬   | 牛が暴れ回る          | 久永ナラマツの昔話  |
| 22 沖縄県付良町小浜島  | 女の子  | 娘の結婚の相談     | ジワの坊主 | 娘の延命の為坊主に寄越せ |    | 若い侍  | 牛と芝居見物で娘に再会     | 沖縄の昔話      |

〔出典〕1沙石集(岩波書店、1966)、2雑談集(三弥井書店、1973)、3地蔵菩薩靈驗記(純群書類從25輯下、1984)、4麓林拾葉集(臨川書店、1991)、5ささやき竹Ⅰ型(室町物語大成(角川書店、1978))、6ささやき竹Ⅱ型(室町物語大成(角川書店、1978))、7番語の根元(角川文庫、1976)、8木造町のむかしコ集(青森文芸協会、1984)、9すねこ・たんぱこ(銀河社、1968)、10遠野の昔話(日本放送出版協会、1975)、11秋田むかしこ第二集(未来社、1968)、12新庄のむかしばなし(新庄市教育委員会、1971)、13おぼの昔ばなし(野島出版、1966)、14甲斐昔話集(郷土研究社、1930)、15岡山県御津郡昔話集(三省堂、1974)、16大山北麓の昔話(三弥井書店、1965)、17森山麓地の昔話(三弥井書店、1968)、18西讃岐地方昔話集(岩崎美術社、1975)、19鹿児島県喜界島昔話集(三省堂、1974)、20福岡ナラマツの昔話集(自家版、1973)、21久永ナラマツの昔話(日本放送出版協会、1973)、22沖縄の昔話(日本放送出版協会、1980)

数において何の問題もない。分布状況を見ると東北地方と奄美諸島にやや多く、中部地方や西日本はまばらである。昔話と中世の説話や物語とは、一見してテーマやモチーフ、また展開において異なるが、ただ両者は歴史的に関係が深く、ここでは違いを顕在化するためにも、あえて同一の表に収めることにした。

落語の「お玉牛」は、その話名からして「嫁の輿に牛」の昔話や説話・物語を下敷きに構成されたものと思われる。梗概を記すと、遊び人の茂平は美人の評判高いお玉を一方的に口説き落とし、夜這いに出かけることになったと吹聴する。当日、家の者は娘の蒲団に子牛を入れておくと、忍んだ茂平は暗闇の中で角や毛、肌を撫でて褒めるが、最後に牛が蒲団を跳ね除けて飛び出す。後日、仲間にお玉をウンと言わしたかと聞かれて、「いいや、モーと言わした」と言い訳するのが落ちになる。「嫁の輿に牛」の類話と言うよりパロディーに近いが、近世的变化の姿という視点から取り上げた。実は、昔話の15と同様であり、18の「びんかと思うたらボウ（牛）になる」という語も落語と無関係ではあるまい。また、落語の蒲団の中のできごととも、古典の「ささやき竹Ⅱ型」<sup>7)</sup>におけるお堂の中で、櫃の中に手を入れ撫でながら「娘（牛）褒め」するクライマックスと同様である。口承文化と文芸の比較の上からは誠に興味深い。

表の作成においては、まず構成要素を大きく二分し、娘を手に入れるための「詐欺」を実行する前半と、箱の中の娘を牛とすり替えて「救出」する後半とに分けた。これに詐欺師に狙われるきっかけとなった「機縁」、および事件後の「結末」を加えた。

## （二）「機縁」と「結婚詐欺」

次に、この表に従いながら構成要素における特徴的な内容について取り上げる。まず、「機縁」の部分では、古典の説話・物語において説話の管理者に寺院が想定されるほどに関係が深かったのに、昔話では寺よりも神の事例が多く、また機縁自体のないものもある。その場合には策略を用いることもせず、直に金や娘を要求するなど、きわめて威圧的である。話の全体からすると寺の関与が薄いのに、それに反して和尚の態度が傲慢であるのは、始めから和尚を悪役の詐欺師に仕立てようとする意図が働いているようだ。

一方で、村の若者などが詐欺師となる場合は、策略を用いた詐欺行為をする。その策略には神仏の陰に隠れて自分の名前を読み上げるものの他に、特定の場所や順番を指示して先回りするなど、古典の策略と同様である。なお、策略で「最初に遭う

男」と指示をして、その通りになる場合とならない場合とがあり、それを「成否」の項目において○×で示した。たとえば表の3と13、17では指示通りにして詐欺師が女を手に入れ、所定の場所に輿で運ばせる。これに対し、1と4は「×」すなわち詐欺師の前に別の男が先に女と出遭い、女を連れて行ってしまう。したがってその後の展開における「牛とのすり替え」は無くなる。この「最初に遭う男」という設定を崩して遭えなくなる1・4の趣向は、その後の展開が大きく変わるなど、物語の生成からすると少し不自然さもあり、この形は差異化をねらった後の後からの変化と考えられる。

ところで、「策略」の中に古典ではなかったものが、昔話では牛および娘の凶相が悪いので祓い(12、22)を行なうという理由で牛・女を呼び出すものがある。これについては後に世界との比較のところで触れることにする。

### (三) 「救出」と牛の意味

後半の「救出モチーフ」の構成要素のうち、まず「救出者」について言うと、古典の場合はその時代の権威者の通名で示される。これに対し昔話の場合は、すべて殿様か侍であり、語り手のイメージには江戸時代を背景に話を組み立てているよう

である。また「すり替え」は、全部と言っていいほど子牛(牛)である。中世の説話・物語も昔話も、この点では一致している。この構成要素の牛だけは、日本における時代を越えた不変性であり、これが外国と比較した場合の、日本の固有性ということにもなる。

最後に「結末」の特徴に触れる。説話・物語においては1と4の「すり替え」のない展開を除いて、女は高い身分の男と結婚しハッピーエンドの形となる。反対に寺僧は大暴れする牛に手を焼く大損害の結果となる。一方、昔話では明確に殿様の嫁になったと語るのは六例(8、12、13、17、20、22)で、他は娘が実家に戻る二例(9、11)、和尚は娘が牛に変化したとして実家に突き返すのが六例(8、9、11、12、13、20)となる。数字上から見れば、昔話では娘の結婚そのものに強く執着しているとは言えない。そのことと関係するのが、突き返された娘の実家では子牛を育て、その牛が縁で娘と再会する(22)という展開に続くものもある。

古典では大暴れする牛は甚だ厄介者であるが、民間の昔話の世界では子牛の行方に強く関心を寄せている。これは牛を育て、また、牛を農耕に利用する現実世界からの発想と考えていいだろう。一つの説話や昔話の背景には、それと深くかわる実際

の生活があり、それを抜きにしてディスクワークにもとづくような安易な判断には慎重を期すべきである。

## 二、世界の「嫁の輿に牛」の展開

昔話や説話の国際比較に際しては、他言語という問題もあるので、類話と認定する基準を明確にしなければならない。そこで、ここでは話の中に「詐欺」と「救出」モチーフがあることを基本としたが、そのモチーフがどのような契機で表れるのか、また、その度合いについてもさまざま違いがある。しかし、違いこそは地域的特性を示すものであるから、ゆるやかな基準で取り上げた。そして、前章にしたがって一例の資料を、構成要素表にあてはめて、「表Ⅱ 世界の「嫁の輿に牛」一覧表」を作成した。この表を四つの地域区分（東アジア、チベット・モンゴル、インド、ヨーロッパ）にしたがって、それぞれ整理し解説する。

### (一) 東アジアの場合

東アジアに韓国、中国に加えヴェトナムを入れたのは、同じ漢字文化圏ということもあるが、それに加え内容面の近さにも

とづいている。ところで、これは余談になるが、三年ほど前に一ヶ月ヴェトナムのハノイに滞在したことがある。その際、準備のためにヴェトナムの昔話の邦訳を読んでいて、日本の「嫁の輿に牛」によく似た昔話があつてビックリした。実はこれが比較研究のきっかけとなった。その梗概を示すと、次のとおりである。

未婚の娘が寺に行き、高級官僚との結婚を祈願する。商人のモンがこのことを知り、寺の精の振りをしてモンと結婚せよと、居丈高に言う。娘は覚悟を決めてモンを捜し、寺の精の言葉を話す。モンは籠に娘を入れて家に担いでいく途中で、狩りに来っていた王子を見つけ、籠を道ばたに置いたまま藪の中に身を隠す。王子が籠を開けると娘がおり、事情を聞いて自分の妻にして、籠にはトラを入れる。モンが籠を担いで家に帰り、母に結婚準備をさせ、籠を開けると中からトラが出てくる。

ヴェトナムの話の詐欺師は抜け目のない商人であったが、韓国、中国の場合は悪質な僧侶である。そして両話とも「詐欺」の部分はなく、いきなり暴力的に娘を拉致し去る。しかし、運搬途中で獵師あるいは実在の寧王に娘を奪われ、トラ、熊にすり替えられ、あぐくに僧侶は食われてしまうといった容赦のない結末になる。中国の『西陽雜俎』は九世紀の唐・段成式の著

表Ⅱ 世界の「嫁の輿に牛」一覧表

|    | 国名／出典            | 発端  |          | 結婚計敗    |               | 救出 |         | 結末   |           | 備考         |
|----|------------------|-----|----------|---------|---------------|----|---------|------|-----------|------------|
|    |                  | 主人公 | 機縁       | 詐欺師     | 策略            | 成否 | 救出者     | 拘替え  | 結末        |            |
| 1  | 韓国／金徳順昔話集        | 同班娘 | 娘の噂を聞く   | 詐欺師     | 娘を簪笄で連れ去る     | —  | 須師の一行   | トラ替え | トラに食われる   |            |
| 2  | 中国／西陽雜俎卷十一       | 莫の娘 | —        | 僧侶      | (輿に掠奪される)     | —  | 寧王      | 熊    | 僧侶は熊に食われる |            |
| 3  | ロシア／北方民族の民話      | 娘   | 僧院に折願    | 貧しい男    | 仏像の陰で最初の訪問者   | ○  | 汗の卒     | トラ   | トラが引き裂く   | 娘の素性確認     |
| 4  | モンゴル／シツテイクル      | 娘   | 観音堂に折願   | 貧しい男    | 仏像に隠れ最初の訪問者   | ○  | 隣国の王子   | トラ   | トラに食われる   | 娘の素性確認     |
| 5  | チベット／屍鬼四七話       | 娘   | 観音堂に折願   | 貧しい男    | 観音に隠れ最初の訪問者   | ○  | 隣国の王子   | トラ   | トラに食われる   | 娘の素性確認     |
| 6  | チベット／世界の民話       | 商人娘 | 娘が寺参り    | 商人モン    | 寺の棚がモンと結婚せよ   | —  | 狩りの王子   | トラ   | 龍からトラ     |            |
| 7  | インド／カターサリットサーガラ  | 娘   | 乞食行      | 苦行者     | 凶相覗いて娘の箱を川に流せ | —  | 王子      | 狼    | 噛まれる      |            |
| 8  | インド／世界民話全集7 インド編 | 娘   | 娘の結婚相談   | 回教僧     | 夢の示現で川に黒箱流せ   | —  | 隣国の王子   | 狩犬   | 犬が噛み殺す    |            |
| 9  | トルガリア／世界の民話 東欧Ⅰ  | 花嫁  | —        | 狡猾者     | 死者と花嫁との交換     | —  | 結婚式の立会人 | 牝犬   | 男の鼻を噛む    | 豆・鶏・豚・牛と交換 |
| 10 | フランス／世界の民話 南欧    | 女中  | —        | テュルランデュ | らばと女中との交換     | —  | 宿の人     | 犬    | 男の鼻を噛む    | 鼠・鶏・豚・牛と交換 |
| 11 | イギリス／世界の民話 イギリス  | 仕立屋 | すもも食いの約束 | 悪魔      | 悪魔に仕立屋を捧げる    | —  | 牛飼い     | 雄ヤギ  | 小悪魔がケガする  | 悪魔との約束     |

〔出典〕金徳順昔話集(三弥井書店、1994)、西陽雜俎(東洋文庫、平凡社、1980)、北方民族の民話(上)(大日本絵画巧芸美術、1978)、シツテイ・クル(淡水社、2013)、チベットの屍鬼四七話(テクネ、2016)、世界の民話 フジテⅡ(ぎょうせい、1999)、カターサリットサーガラ(岩波書店、1954)、世界民話全集7インド編(宝文館、1958)、世界の民話 東欧Ⅰ(ぎょうせい、1999)、世界の民話 南欧(ぎょうせい、1999)、世界の民話 イギリス(ぎょうせい、1999)

であり、この頃からすでにこうした救出モチーフがあったことが知られる。

## (二) チベット・モンゴルの場合

中央アジアの周縁に位置するチベット、モンゴル、そしてロ

シア・シベリアの北方民族は、遊牧とオアシス農業などが中心の国々である。地域環境が共通していることが関係しているせいか、その話は近似しており、同じ系統の直接的な関連も考えられる。

ある貧しい男が、老夫婦の会話を盗み聞きし、翌日、観音堂

に老夫婦が参詣に来る前に、男は仏像の陰に隠れている。そして、「明日、最初に訪ねてくる男に娘を与えなさい」と言う。こうして首尾よく娘と財宝を手にした男は、娘を箱に入れ自分の村に帰る。まず箱を大地に埋めて置き、自宅に戻って家族に金持ちになる儀式を行なうと言う。一方、箱を埋めた場所に通りがかった王子は、黒くなった砂山に矢を射り、突き刺さった箱から娘を救出し、その代わりにトラを入れて去る。それと知らずに男は家に運んだ箱を開けると、中からトラが飛び出し、男は食われてしまう。

その後、娘は王の妃として三人の子を儲け、幸せに暮らしているが、家臣が後の出自を疑うようになり、気に病んだ后は、城から逃れるように故郷に帰ってくる。すると実家の辺りに立派な御殿や寺院が建っており、弟や両親は王妃を迎え入れる。一緒に来た家来たちは、このことを確認し城に戻る。翌日、目が覚めるとすべては幻影であったが、后は威信を取り戻すことができ、再び城に帰って暮らすことになった。<sup>(9)</sup>

この後日談の現実的な背景には、結婚は相応する相手とするものという、強い身分制が介在しているかもしれない。この展開がこの地域における話のリアリティーを保証しているものであろうから、その意味では、「嫁の輿に牛」のユーラシア内陸

部の地域的特性を示すものといつてよいのかもしれない。

ところで、モンゴルの事例が載る『シッディ・クール』<sup>(10)</sup>は、インドの『屍鬼二十五話』のモンゴル版と言われ、チベットにも何冊かのチベット版がある。しかし、インドおよびチベット版にはこの話が載せられていないので、後に加えられた説話であろう。インドやチベット、モンゴルとの説話の交流は、仏教を通じて行なわれていたことは十分に想像される。

最近、この『シッディ・クール』を訳した西脇隆夫は、巻末で各話の類話紹介を行なっているが、その中に「嫁の輿に牛」の類話もいくつか紹介されている。要約であるために、ここでは取り上げなかったが、この話が中国の周辺には多数あり、広く受容されていることはまちがいない。

### (三) インドの場合

インドの場合は、中世の頃に編集された『カター・サリット・サーガラ』に早く掲載される。梗概を示すと、金持ちの商人の家に、「無言の行」を行なう苦行者が乞食に訪れる。施しを運んできた美しい娘を見て、思わず声を発してしまう。商人が理由を尋ねると、苦行者は娘には不吉の相が現われており、夜間に燈火をつけた黒箱に娘を入れてガンジス川に流さないと、家

族の破滅だと告げる。商人がその通りにして川に流すと、水浴に来ていた王子が籠を見つけ、開けると美しい娘がいる。代わりに猿を入れて流したのを、苦行者に遣わされた弟子たちが拾って届けると、中から猿が出て囁まれてしまう。

コミカルな展開で人物の行動が生き生きと描写されている。この話の中で、苦行者は娘に不吉の相が現われていると告げ、自分のもとに寄越すようと謀る。この部分は日本の昔話の中にも、娘および牛に凶相が出ていると話すのと共通している。といって、これを例にインドから日本への伝播を説こうとするつもりはないが、インドも日本も祈祷僧の手段として、不吉の相を理由に自分のもとで治療等の対処を行なうことがあったからであろう。説話と現実生活との一致と考えたい。

なお、『カター・サリット・サーガラ』の話は、現代のインドにも伝えられていることが、『世界民話全集7』などの伝承からわかるが、同書の岩本裕の解説によるとセイロンの近くにもあるという。インドの伝承状況は、日本を考える場合に大いに参考になる。

#### (四) ヨーロッパの場合

最後にヨーロッパの例を取り上げるが、実はヨーロッパの場

合は、これまでの内容と大きく変わっていて、前半の詐欺モチーフはない。また、救出モチーフもこれまでの「救出」と違って、狡猾者が次々と交換を要求していき、最後に手に入れた花嫁（女中、悪魔）の代わりに動物がすり替えられる展開が一致する。フランスの「テュランデュ」は、次のような内容である。

狡猾なテュランデュは持っていた虱一つを宿屋に預け、めんどりに食われると、めんどりを要求する。次の宿でそのめんどりが豚に食われると豚をもらう。その豚がらばに蹴られて死ぬと、今度はらばをもらう。そのらばを女中が誤って井戸に落として死なせると、女中をもらって袋に入れ宿に預ける。宿の主人が袋の女中と犬とをすり替えておき、テュランデュは自分の家で女中と思って袋を開けると犬が出て、テュランデュの鼻を噛む<sup>13)</sup>。

この展開は日本の「藁しべ長者<sup>14)</sup>」と同様で、日本の場合は観音の示現で、次から次に高価なものに代わる成功譚で終わるが、フランスの場合は最後のすり替えによって、どんでん返し<sup>15)</sup>の失敗譚になるという違いがある。

9のブルガリアの例では、狡猾者が立て掛けておいた死者を、結婚式に参加していた人が突き倒したので殺されたと騒ぎ立て

て花嫁を得るが、牝犬とすり替えられてしまう。この死者を立て掛け、突き倒されて死んだと騒ぐトリックは、日本の昔話「知恵有殿」<sup>⑤</sup>とも一致する。

11のイギリスの場合は、すももを食べる際に、もうこれ以上食べたら悪魔にさらわれてもかまわないと約束し、自ら墓穴を掘ってしまう。そのため悪魔に命を奪われるところを、牛飼いの機転で雄ヤギとすり替えたので助かり、悪魔のもとでヤギが大暴れして悪魔たちがさんざんな目に遭うという結末になる。以上の用例は、小澤俊夫の『世界の民話』の「解説編」<sup>⑬</sup>を参考にし、同シリーズから引用した。

ヨーロッパの事例は、アジアの「嫁の輿に牛」とは大きく異なり、「累積譚」<sup>⑭</sup>の中のパターンの一つの最後の部分で「すり替え」のモチーフが使われる。説話相互の直接的影響とはいえないが、実生活から起こる発想が、こうした一致の背景にはあるのかもしれない。

### 三、昔話「嫁の輿に牛」の国際比較

昔話「嫁の輿に牛」をめぐって、日本中世の説話・物語と昔話、および世界との同じタイプ、モチーフの昔話の内容と比較

してきた。これを踏まえて、この昔話の誕生から成長、および移動の過程を、昔話の発生、テーマ、伝播の点から跡付けて見たい。

#### (一) 昔話の発生

一般には昔話がいつ、どこで発生したのかを決めるのは不可能に近い。それは本来昔話が、不特定多数の中で口頭で語られる性格によるものであり、また、必要がなければ文字に記録されることがないからである。それはこの「嫁の輿に牛」の昔話についても同様である。

ただ蓋然性の問題として言えば、仏教のルーツのインドが発生地と言えるかもしれない。というのは、話の展開に寺や僧僧が大きく関わっているからである。まずは発端において、良縁を期待して娘が寺参詣に来るが、その美しい娘を見た軽薄な僧が奸計を謀る。それも仏像の陰に隠れ、仏を騙るという非道極まりない行為をとるのは、世俗化する仏教を批判し否定する立場からの発想といえる。しかし、この世俗化の問題はインド特有ということではなく、仏教国すべての問題でもある。そのことが仏教国インド発生を確実なものにするのかもしれない。というのも昔話の内容が仏教に関係しているだけでなく、この墮落

僧の話を伝承している国々が、インドの他にチベット、モンゴル、日本など同じく仏教国でもあるからである。仏教国であることが、話の信憑性すなわちリアリティーと結びついて語られるからで、仏教および僧侶が社会的勢力として強い力を有している環境でこそ、この話題にインパクトがある。

ところで、墮落僧の問題は仏僧に限らず、他宗教にも聖職者の墮落の話があり、本稿の「はじめに」で、松原秀一が紹介したフランスの『新百物語』の類話の後半で、修道僧が娘を身籠らせ、それを神の子であると欺くなどは、キリスト教にかかわる問題である。また、中世のヨーロッパの教会の聖職者の墮落した姿はボッカッチョの『デカメロン』<sup>(18)</sup>にもユーモアに描かれている。同時期の日本の『雑談集』や「ささやき竹」の墮落僧と同様である。何にリアリティーを寄せるかは国々の文化環境の問題であるが、構造的問題は人間社会が常に内包しているといえよう。

しかし、日本における伝承を通時的に見ると、中世において深く寺院が関わっていたのが、昔話においては仏教の影響は少なくなる。詐欺師が説話・物語における寺僧から、昔話の若者へ移るに連れて、仏教色も薄らいでくる。この問題はテーマ性ともかわつてくるので、次項で再述する。

## (二) 昔話のテーマ

この昔話は前半の「詐欺モチーフ」と後半の「救出モチーフ」から構成されていることについては、すでに確認してきた。ただ、この二つのモチーフをテーマとの関連から見ると、両者のバランスの取り方で、微妙に内容に変化が生じてくる。たとえば、前者の「詐欺」に比重が置かれた場合、詐欺のための「策略」のレトリックにこだわりが強く、その結果、手腕を行使した人物の最後は間抜けで滑稽さを強める傾向で終わる。古典の「ささやき竹Ⅱ型」の西光坊や、『鶯林拾葉集』における「坂ノ者」との結婚などがその典型といえる。

一方で、後者の「救出」に比重が置かれると、韓国や中国の事例に見られるように、娘と凶暴性そのもののトラとすり替えて被害に至らせる。この被害という嚴罰主義のためには悪僧の非道な振る舞いすなわち娘の拉致や強奪といった凶暴な行動が前提となる。いずれにおいても、この二つのモチーフの背景には、不正な行為には相応の懲罰があるという社会悪是正の論理が通底している。その比重の置かれ方により展開に違いが生じてくるということになる。

ただ、寺僧を中心としたこれらの見方から、娘を中心にした

見方になると、これによっても微妙な違いが出てくる。日本の説話・物語の場合では、結婚が大きなテーマとされており、その場合には娘が申し子であり、あるいは没落貴族の姫君、また、多彩な能力の持ち主といった人物形象がなされ、叙述も娘視線をもとに展開していく。そして、救出者の身分が当時の通名を用いるなど、現実的な様相を濃くする。こうした傾向は話の作り手や享受者層の意向が、娘と高貴な方との結婚への期待となつて反映されているのであろう。

この昔話が、結婚を強く意識しているという点では、チベットのモンゴルなどの「娘の出自」の問題も、これに関係しているのかもしれない。庶民層の娘と王との結婚のリアリティーの確保のための出自の確認といえるが、その前提となる結婚への関心が高いからでもある。その点では、ブルガリアやフランスの「テュランデュ」の場合においても、ペテン師が最後の交換として花嫁、女中を希望するのは、結婚への執着を示しているからに他ならない。

ところで、この結婚のテーマについては、二章の「救出」と牛の存在」で触れたように、日本の昔話で娘の結婚と同等に関心を寄せているのは、牛の飼育の問題であった。これは牛を墮落僧に対する懲罰の表徴とする見方ではなく、生活の視点か

ら把握していることに他ならない。古典からの通時性の問題として見ると結婚のテーマが拡散し、二次的展開の様相を示しているといえよう。それは娘の結婚が「殿様」といった類型的な相手となつて、いわゆる外国昔話の「王子」と同様に、昔話の図式的な人物設定とも関係している。テーマの変質は、昔話がどのような時代や文化環境で語られるかによつて、その内容に変化が生じてくるものであり、言い換えれば昔話が語り手、聞き手とともに生きている証拠でもある。

### (三) 昔話の伝播

文化の歴史や異質性を説明する学説に、水が低い方へと流れるように人文化も高きから低きに移動すると説く「伝播論」がある。一方、人間の社会、生活環境がある水準に達すると自然に起こるとされる「多元的同時発生論」とがある。昔話研究法においては、主として地理歴史学的方法が伝播論を、心理学的・構造論的方法が同時発生論の立場に拠っていると単純化してとらえることができる。

さて、昔話「嫁の輿に牛」を仏教をキーワードに解釈すると、伝播論の方が有力である。すでに「昔話の発生」でも述べたように、インドの釈迦が説いた教えの仏教が、「仏教東漸」の流

れによって西から東への道をたどって広まっていた。現在の昔話を伝承する国々をつなぎ合わせていけば、インドからアジアの内陸部を通りチベット、モンゴル、東アジアを経由して日本に入ってくるルートが導かれる。そのルートの過程を経る中で、その地域における独自の変容を遂げながら現在の状態になったと考えることができる。

その流れでとらえれば、日本の中世における説話・物語の展開は、仏書あるいは仏教関係者によって取り上げられ、当時の日本の歴史的社會に沿うように再構成され記録されたといえる。一方で、ヨーロッパの異色の「すり替え」モチーフは、インドからの直接の伝播と判断するには材料が乏しく、今後の資料の収集を俟たなければならず、今後の課題となろう。

### おわりに

昔話「嫁の輿に牛」は、古典の「ささやき竹」の類話としても知られており、これまで国文学における諸本や成立にかかわる研究はあるが、昔話や国際比較についての研究は紹介にとどまる程度である。本稿は、昔話研究の立場から、この昔話を日本の古典やアジアを中心とした国際比較の視点から追究してき

た。

まず、古典との比較でいえば、仏僧の策略による娘獲得はみごとに失敗し、娘は身分高い人物との結婚を遂げる。ところが、昔話の世界では娘の結婚への関心はそれなりとしても、古典では厄介者に過ぎなかった小牛が、娘の実家に戻され、そこでの飼育にかかわるなど新たな展開を見せる。牛を農耕等に利用する環境での変化といえる。

続いて、国際比較においては、日本では軽率な寺僧の振る舞いを揶揄嘲笑するのに対し、韓国、中国の事例では僧侶が娘を強奪し、それに対して殺害という手段で制裁を加えるなど過激な展開といえる。またチベット、モンゴル等では、王子と結婚した娘の出自を追求する後日談に続く。これにはこの地域の身分制が関係しているかもしれない。また、インドでは、ガンジス川に箱を流すなど、それぞれの地域的特性が表れていて興味深い。

この昔話が、早くインドの説話集に出てくることや、仏教にかかわる寺院や僧侶などの関与から、インドを發生の地と考えるのが蓋然性が高い。それが「仏教東漸」の流れから、中国内陸部を経て、日本に中世ごろ僧あるいは仏書によって持ち運ばれてきた可能性がある。当然ながら、それぞれの国々に定着し

ていく過程で独自な変化を遂げていったと思われる。

ヨーロッパにも「救出モチーフ」の変形と見られる「花嫁(女中)すり替え」のパターンがあるが、この昔話との直接的な関係については、今後の課題となる。『世界話型インデックス』A T 896「好色な聖者と箱の中の少女」の伝承分布地の紹介には、西アジアにも類話があるとされるので、今後この地域の伝承をまじえて、さらに研究を進めていきたい。

閑敬吾は、昔話は博物館の展示品のように死物ではなく、人々の頭と口にあるものとして「昔話生物学(昔話生態学)」を提唱した。昔話は時代とともに変化しながら生きていくものである。その原則に照らしながら、変化する昔話「嫁の輿に牛」の姿に注目してきた。一つの昔話がどのように発生し成長、変化を遂げながら移動していくかということを明らかにするのが地理歴史学的研究方法である。本稿はその方法にしたがっていることを記しておく。

注

- (1) 市古貞二『未刊中世小説解題』(楽浪書院、一九四二)  
(2) 永井義憲「講経談義と説話―『鶯林拾葉鈔』に見えるたるさ、やき竹

物語―」(『大妻国文』第4号、一九七三)

(3) 沢井耐三『お伽草子』(貴重本刊行会、二〇〇〇)

(4) 南方熊楠「美人の代りに猛獣」(『民俗学』一九三〇年十二月)

(5) 松原秀一「ささやき竹」(『中世の説話 東と西の出会い』東京書籍、一九七九)

(6) アールネ「昔話の比較研究」(閑敬吾訳、岩崎美術社、一九六九)

(7) 『室町時代物語大成』第六巻にある「ささやき竹物語」(岩瀬文庫蔵)は比較的短くI型、「ささやき竹」(赤木文庫旧蔵)は長編でII型に分類される。

(8) 「寺の精」『世界の民話 アジアII』(ぎょうせい、一九九九)

(9) 「娘のへまブラデーブ」『屍鬼四十七話』(梶濱亮俊訳、テクネ、二〇一六)

(10) 西脇隆夫訳『シッディ・クール モンゴル説話集』(淡水社、二〇一三)

(11) 「屍鬼二十五話―インド伝奇集」(東洋文庫三二三、平凡社、一九七八)

(12) 岩本裕『世界民話全集 7』(宝文館、一九五八)

(13) 「テュランデュ」『世界の民話 南欧』(ぎょうせい、一九七七)

(14) 『今昔物語集』第十六巻(観音祈願型)(『日本古典文学全集』岩波書店)

(15) 「知恵有殿」『日本昔話大成』第十巻(角川書店、一九七九)

(16) 『世界の民話 解説編』(ぎょうせい、一九七八)

(17) 齊藤君子「累積昔話とはなにか」(『昔話―研究と資料―』第39号、二〇一一)

(18) 『デカメロン』(平川祐弘訳、河出書房新社、二〇一二)